

平野謙全集

第四卷

㊦ 新潮社版

印刷／昭和五十年七月二十日
発行／昭和五十年七月二十五日

平野謙全集 第四卷

著者／平野謙

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社 郵便番号一六二 東京都新宿区

矢来町七一 電話東京二六六・五一・一一（業務）

二六六・五四・一一（編集） 振替東京四・八〇八

印刷所／塚田印刷株式会社

発行／昭和五十年七月二十五日

印刷／昭和五十年七月二十日



乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

平野謙全集／第四卷 ■ 目次

わが戦後文学史

民主主義革命のはじまり	10
「暗い谷間」	22
「政治と文学」論争	34
小林多喜二問題	44
敗戦までの私	55
高見順における敗戦	70
『高見順日記』	90
亀井勝一郎の戦後	99
戦争下の伊藤整	116
ソヴェト・ロシア入国記	124
続・戦争下の伊藤整	139
「社会化された私」	147
『鳴海仙吉』	160

『小説の方法』	173
『風俗小説論』	190
『谷崎潤一郎論』	198
潤一郎と春夫	206
『志賀直哉論』	215
老年の哀しみ	221
続・『志賀直哉論』	228
『暗夜行路』論	236
志賀直哉論史ということ	265
ひとつの結び	273
文学・昭和十年前後	
小林多喜二の死	278
作家同盟の解散	286

最大の敵・林房雄	294
亀井勝一郎の登場	303
同人雑誌《批評》について	312
《現実》の創刊	318
『転形期の文学』	324
シェストフ受容	336
痴人の夢	343
白鳥と秀雄	351
『私小説論』以前	359
人民戦線のこと	367
独立作家クラブのこと	374
社会主義リアリズム論争	386
《世界文化》のことなど	395
中間の締めくくり	403

昭和文学の意味	415
私小説と共産党	426
行動主義文学論	434
《人民文庫》の問題	450
散文精神論の深化	460
転向文学論	472
続・転向文学論	479
久保栄と中野重治	487
『私小説論』の周辺	497
小林秀雄と中野重治	504
《文学界》の同人	522

平野謙全集

第四卷

わが戦後文学史

民主主義革命のはじまり

はしがき

戦後二十年間の歳月がとびさったことは、思えば夢のような事実である。ほとんど戦慄的な事実だ。まだ一カ月にならぬから、つい先だってといってもいいわけだが、私は五十八回の誕生日を迎えた。もう二年たつと、私は還暦を迎える勘定になる。これも戦慄的な事実である。二十年前のいまごろ、私は故郷にあって島崎藤村論の原稿を書きついでいたか、書き終えていたはずだが、《近代文学》創刊号のために執筆していた自分のすがたを思うと、つい昨日のような気がする。しかし、あれから確実に二十年の歳月がすぎさったのである。そして、私自身も確実に変わってし

まった。思いもよらぬ変りかたともいえるが、また、かくなり果つるは理の当然ともいえる。その歳月の意味をもう一度私なりに追体験することは、わが貧しい生涯の締めくくりとして、まんざら無意味でもあるまい。これからあとどれだけ生きられるか、とにかく死がそんなに遠くない地点までやってきている今日ともなれば、そんなことでもするより、私一個としてはもはや締めくくりようもないのである。

わが貧しい生涯と書いたが、単なる修辭として、私は書いたのではない。ほとんどジダンダ踏む思いで、私は書くのである。昨今、しきりに思うことだが、小人珠をいだって罪ありというような言葉にひっかけていえば、小人珠をいだって罪なしというのがおれの生涯じゃなかったか、という気がする。これだけでは他人に通じにくからうが、私のうぬぼれもこめて、そんな気がする。無念である。そこで、せめて我流戦後文学史でも書きのこしておこうか、ということにならざるを得ない。では、どんなふうに書くか。小説でいえば私小説ふうに書く。それよりない。つまり、この私が主人公となるわけである。自己中心の戦後文学史。江見水蔭にもそんな文学史があったはずだが、私もあのテでゆくしかない。ただし、私自身を主人公にするといっても、この貧弱な私をことごとく正面に押したてるといいう意

味ではない。私の興味のある、私の関心をひく戦後文学の現象を、もう一度追体験してゆく、というほどの意味である。すべての文学現象にまんべんなくつきあって、客観的に精確な戦後文学史を書きあげるのではない、というくらいの意味である。それ以外に、目下のところ具体的なプログラムはない。

そういう私にとって、敗戦直後の最初の文学的体験はまず雑誌《近代文学》の創刊のことであり、それにつづく中野重治とのいわゆる「政治と文学」をめぐる論争のことである。なんといっても、このふたつの体験が、私の戦後体験の最大なものであり、爾来二十年間の私の文学的軌道も、大きくそこに規制されている。ところが、《近代文学》創刊前後のいきさつについては、すでに埴谷雄高の精密な回想などがあって、それにつけくわえたい私自身の感想もないわけではないが、いまはあとまわしにしたい。まず中野重治との論争からはいつてゆくことにしたい、と思う。実をいえば、あの論争は私にはあと味がわるくて、今日までマトモに読みかえす気がしなかったのである。今度はじめて心をおちつけて読みかえた次第である。なぜあと味がわるかったか、ということなどもおいおい書くつもりである。

敗戦直後の中野重治

敗戦直後の中野重治の活動として、最初に印象にのこっているのは、《展望》創刊号に発表された『冬に入る』という随想だった。それは敗戦直後の新聞に発表された石川達三と河上徹太郎の言説を批判したものだった。当時の私の印象では、その批判は鮮烈なものだったが、今日読みかえてみると、さほどのこともない。しかし、それは現在の私が当時の雰囲気をうまく思いだせないせいであって、たとえば河上徹太郎はその批判によってすくなくならずたじろいだのではないかと思う。

「八月十六日以来、わが国民は、思いがけず、見馴れぬ配給品にありついて戸惑いしている。——飢えた我々に『自由』という糧が配給されたのだ」と、昭和二十年十月二十六日の《東京新聞》に書いた河上徹太郎は、「日本の国民が今持っている自由はたしかに国民がこれを全的に獲得したものではない。日本の国民は王の処刑をふくむ革命の実行をしたものでもなく、バスチーユの破壊を実行したものでもなかった。それは帝国日本の連合国に対する完全な敗北によって、それを機縁としていわば外側から日本国民に与えられたものであった。しかし日本の国民は、自己の民主主義革命を実行できぬうちに自国の敗戦によってそれを

外側から得ねばならなかったという、帝国日本から『第四等国への顛落』と外部から銘うたれねばならぬような事態をとおしてそれを得ねばならなかったという歴史的事実のうちに、却って与えられた自由を『配給された自由』と称ぶことを一般に許さぬ内面的権利を持っている。それだから、日本の国民にとって与えられた自由は決して『思いがけぬ』贈りものではなかった。それは日本の国民が喘ぎかわいて待ったものであった。日本の国民は与えられた自由の前に少しも『戸惑いして』いない。却って日本の国民は、与えられた民主主義が自己の力で独立に獲られたものでないことを泣かねばならぬほどよく知っている。それだから日本の国民は、与えられた民主主義の糸口を大事なものとして、貴重に取り扱わねばならぬことをよく知ってそれをそのように扱っている」と、中野重治から批判されて、その語調にすくなからず気押されたのではないかと思う。すくなくとも河上徹太郎はそれに直接反駁しなかった、と記憶している。しかし、無条件降伏（無条件降伏ではないという説も最近あるらしいが）という未聞の事態に直面しておおくの「日本の国民」が「配給された自由」に「戸惑い」したことはたしかだった。中野重治がいうように、それを「配給された自由」などとよぶを一般に許さぬ「内面的権利」を感得していた、などとは思えぬのである。ただ

この場合、敗戦とともに与えられた「自由」に関する二人の認識がまるでちがっていたことだけは明らかである。「見馴れぬ配給品」「配給された自由」「自由も配給品の一つとして」などというシニカルな言いだが、中野重治にとっては「自由を穢しているもののように思えて」ならなかったのである。石川達三が「闇をやらずに餓死した大学教授は愚者の典型だ」と放言したのに我慢ならなかったのとひとしく、「配給された自由」という「気がきいているようにみえる」「言いまわし」のうちに、中野重治は敗戦にまでいたる日本国民全体の犠牲をわきに押しやろうとする気配を感じたにちがいない。それは「自己の民主主義革命を実行できぬうちに自国の敗戦によってそれを外側から得ねばならなかった」と、泣くにも泣けぬ気持で痛感した人間と、そうは感じなかった人間との認識の相異にほかならなかった。しかし、「自己の民主主義革命を実行できぬうち」に敗戦をむかえたと痛感した日本国民が、八月十五日当時果して何人いただろうか。おおざっぱにいえば、私は敗戦を解放と受取ったもののひとりである。しかし、その解放感はずぐさま「民主主義革命」とは結びつかなかった。いや、敗戦と「民主主義革命」とを結びつけるような政治的な発想は、当時の私にはまるで缺失していた、といってもいい。にもかかわらず、いや、それゆえにこそ、私

は中野重治の石川達三・河上徹太郎批判を鮮烈な印象をもって受取り、それを肯定したのだったろう。いまになって思えば、敗戦とともに日本にもたらされた自由と民主主義は、たしかに「配給された」ものであり、それをマトモにつかいこなす術を、私どもは知らなかった、といっている。河上徹太郎の言葉はそのシニカルな文学的ないまわしとともに、たしかに時宜に合ったものともいえるのである。しかも、中野重治の批判に、河上徹太郎は黙したままあえて反駁することをしなかった。それを私は河上徹太郎がたじろぎ、気押された結果ではなかったか、と推定するわけだが、明らかにそれは一文学者として中野重治の批判にひとつの道理を認めたためではないかと思う。こういういいかたはものごとを単純化する嫌いがあるが、いづれにせよ、八月十五日の受取りかたにおいて、中野重治と河上徹太郎とは、大きな認識の相異があったことは事実である。私自身のことをさしはさめば、そういう中野重治と河上徹太郎とのちょうど中間に私は位していた、といってもいいかと思う。この際、私自身のことなど持ちだすのはセンエツだ、と読者が思うなら、高見順にここへ登場してもらってもいい。高見順は昭和二十年八月二十一日の日記につきのように書いている。

私もまた恥じねばならぬ。私もまた己れを棚にあげることは許されぬ。戦争終結と知って、私はホッとした。これでもう恋愛小説はいけん、三角関係はいかん、姦通を書くことはまかりならぬ等々の圧制はなくなる、自由に書ける日がやがて来るだろう、全く「やり直し」だ、そう思ってホッとした。だがその「喜び」は、敗戦という大変な代償によって与えられたのである。今になって愕然とするのである。私は、ホッとした自分を恥じねばならぬ。誇張すれば売国的感情であった（中略）かかる醜惡なボロだらけの、いい気なものだった日本の故に日本は敗れねばならなかったのだと、しやあしやあしてはおれないのである。

すくなくとも、ここに語られてある解放感、中野重治のそれとは質的にちがったものだ。しかし、河上徹太郎のように「配給された自由」と斜にかまえる姿勢ともまた無縁である。この問題については、当時の文学者のさまざまな態度のなかで、私は平林たい子のそれに共鳴した。平林たい子は『終戦日記』（中央公論・昭和二十二年二月）の八月十五日の項に、いわゆる玉音放送をきいた感想として、つぎのように書きしるしている。

あり得ぬことに非ずと心に用意はあれど、あっと驚く。戸外の油絵の如き炎熱の中を、供出の草を山の如く背負って行く人あり。あゝついに終った。終った。戦争も、何も彼も、終ったのだ。終ったのだ。天に向いて、何か百遍も叫んで躍り上ってみたき心地なり。解き放たれたのだと思いたいけれど、緊縛の強かりしためかすぐに解放の感覚は起らぬなり。

しかし、平林たい子は八月十六日の項にはつぎのように書きしるしている。

墓参。着換のため裸となるとき、我が肩の肌につきたる赤い斑点を鏡中にみる。一昨日草を背負ったときの荒縄の痕とは知るけれども、時代が我が身を縛したる痕跡に思いなぞらえて撫でてみる。思えば、何ほどの憤りと悲しみをこの年月胸に圧搾し来りしことぞ。

私が感銘したのは、もとより「緊縛の強かりしたためかすぐに解放の感覚は起らぬなり」という一句である。たしかその一句について、当時本多秋五と語りあったおぼえがある。程度の差こそあれ、これが私どもの八月十五日における解放感の最大公約数ではなかったかと思う。無論、荒正

人の場合、小林秀雄の場合、それぞれニュアンスのちがいはある。荒正人は「この自由を『配給された自由』だなどと、闇米の自由にあきていたため、配給米のそれなど口にあわないなどといった口調でかたった男の文字がいまだ活字になっているのは驚くべき事実である。けれども、これを以て、一陽来復、待てば海路の日和あり、などと、鼻唄まじりでお祭り騒ぎをしている連中には、いますぐと組したくはない」（『終末の日』）と書き、小林秀雄は「これからの文化の危機は、そこにあるような気がします。文化の極端な政治化が現われる。既に現われている。政治家が文化の指導者面をしますよ。政治を談じないと馬鹿みたようなことになりますよ。藝術家の政治的無関心、そんなことを言われるのが恐いからせいぜい政治的関心を示す。そんな連中が一ぱい出て来ますよ。しかし、僕は御免だ。僕は政治が嫌いです。政治家にはなれない。これは大事なことだと思えます。政治家という一種の人間のタイプがあるのだ。政治形式はどう変ろうが、政治家という人間のタイプに変わりはない。僕はそう信じています」（近代文学・昭和二十一年二月）と語った。しかし、おお根のところ、無条件降伏を一種の解放と受取った点では、中野重治から河上徹太郎にいたるまで、文学者はほぼ共通していたのではない。いわば中野重治はその尖端に立っていた。与えられた